平成２８年１０月１９日(水)

老球の細道２７６

福島医大クリニック雑感

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

Ｂリーグ開幕と共に日本のメデイアでのバスケットボール露出度が軒並み多くなったような気がする。特にバスケットボール人気の元祖である田臥勇太の出演が多い。先日もＮＨＫのスポーツ番組で田臥特集が組まれていた。何度もメデイア出演を経験しているせいか、インタビュー慣れして質問への受け答えも的確であった。

番組の中で田臥がよりどころとする言葉が紹介された。「Ｎｅｖｅｒ　ｔｏｏ　ｌａｔｅ」。「今からでも遅くはない」という意味である。何歳の人にも、初心者にも熟練者にも、何かにチャレンジしようとする時に背中を押される言葉であると思う。

先日東日本医科大学でベスト４に入った福島県立医大バスケットボールチームからクリニックの依頼を受けた。テーマは「ドリブルの基本」。今年に入って２回目の依頼になるが、前回も「シュートの基本」ということで、大学生でありながらも、今なお基本を学ぶことに意欲を持っていることに感動させられた。まさに基本こそ「Ｎｅｖｅｒ　ｔｏｏ　ｌａｔｅ」。

今回のクリニックもドリブルの基本ということで、小学生がやるようなドリブルの正しいつき方、ドリブルチェンジの正しい方法、ドリブルのコーデイネーショントレーニングなどを２時間にわたって指導した。細かいことを手抜きせず、集中して一生懸命に取り組んでくれた。教えられる側の姿勢が教える側の意欲をかきたてる。

思い起こせば１０数年前にやっていた坂下高校での「トップアスリート講習会」にも福島医大バスケットボール部は参加していた。日曜日にもかかわらず、わざわざ福島からやって来て、小学生、中学生に交じりながら、少しの手抜きもせずに全力で取り組んでいた姿は圧巻だった。そのチームカラーが今もなお伝統として息づいていた。

かつてアメリカでは故ピート・ニューエルが主宰する「ビッグマンキャンプ」が開催されていた。ＮＢＡのシーズンオフに行われ、ＮＢＡのプレイヤーや日本代表期待のビッグマンが参加していた。どんなにＮＢＡのスーパースターであろうが、さらに自分のスキル、パフォーマンスを向上させるには基本に立ち返ることが必要だということであった。すでに現役を退いた老練のピートニューエルの指導に素直に耳を傾けて、ピボットやターン、ストップなど細かいところの練習を一生懸命にやっていた。

また、日本の天才剣豪宮本武蔵の言葉にも「山の奥をたずぬるに、なお奥へ行かんとおもえば、又口へ出る」（魚住孝至著『宮本武蔵』岩波新書）という言葉がある。技を一層上達させようとすればするほど、「入り口」の基本に戻らなければならないという。

バスケットボールに励むドクターが増えることは願ってもないことである。会津協会会長の松井先生のようなドクターが増えるということである。アスリートは自分の体に非常にナイーブである。ケガした時、体調を崩した時に気軽に相談できるドクターが身近にいればどれだけ心強いかわからない。私も松井先生によってどれだけ救われたかわからない。

クリニックの最後に、医大生にはこれからもバスケットボールに関わりつづけることをお願いした。バスケットボールを創案したジェームス・ネイスミスは医学博士の資格を持っていた。ボールのゴムチューブを発明したダンロップもイギリスの獣医さんだった。